

一次の文章を読んで、問い(1)〜(8)に答えよ。なお、本文は、保莉美の『ラディカル・オーラル・ヒストリー』の引用から始まる。また、設問の都合上、省略した箇所がある。(36点)

僕たちは、歴史というものを、歴史学者によって発見されたり生産されたりするものだと思い込みすぎていないでしょうか。人たるもの(もしかしたら人間以外の存在者たちも)すべからず、歴史のメンテナン스에 参与しているということに、もつと注意を向けてもいいんじゃないか。僕たちは、歴史実践というものを、歴史学者が古文書館や研究室でおこなっている辛気臭い作業だつていうふうに思いこみ過ぎているんじゃないか。(保莉 二〇〇四、二二頁)

そう。「書かれたもの」は本来歴史のほんの一部でしかないはずだ。戦国武将や幕末の志士たちだけが日本の歴史の主人公ではない。大きく国のあり方を変えた戦乱や革命だけが歴史上の出来事ではない。歴史書の上では無名の人物も脈々と続いてきた歴史の主人公であり、そんな人たちの何げない日常は立派に歴史上の出来事である。私たちは誰もが皆で歴史を紡いでいる。そして、無数の人々が紡いでいる網の目状の歴史の先端部分にあるのが現在のなだ。

そう考えるならば、人間以外の動物にも歴史はありうる。少なくとも、現在生きているすべての生物は進化という長大な時間の流れの端っこにいる。進化が歴史的なプロセスであるということは多くの研究者が認めることである。その歴史は生物の繁殖を通じて次世代に受け継がれる。受け継がれるものはDNAだと考えられることが多いが、それだけではない。実際に受け継がれるのは、細胞という生きたシステムである。そして、親が子どもを生み落とす環境やタイミングもまたそうである。いつ、どこで生まれるかは当該個体にコントロールできるものではないが、当然その個体の一生には大きな影響を与えているはずだ。そうした意味で、ある生物個体の生涯は最初から大きな歴史の流れの中にある。

そのような「自然な」時間の流れを歴史と言おうのではない、という反論がありうるだろう。私たち人間は、もつと「社会的な」時間の流れの中にいて、過去に思いを馳せたり、何世紀も前の先人の思想に触れたりできる——そんな時間の流れをこそ歴史と言ふべきだ。だが、「社会的な」時間の流れすらも、本当に人間だけのものなのだろうか。六章で触れたように、永続的な群れ生活を送る動物においては、行動的な文化が継承されている。生物学的な遺伝だけではなく、動物の振るまい方が継承されるのには社会的な経路もあるのだ。

マハレM集団のチンパンジーが示す文化行動の一つに「対角毛づくろい」と呼ばれるものがある(四章も参照)。同じタンザニアの中にあるゴンベのチンパンジーたちは対角毛づくろいをしないので、全てのチンパンジーがおこなう行動というわけではない。マハレでは誰かがどこかの時点でこの行動を「発明」したのだろう。M集団ではこの行動は調査初期の頃から現在に至るまで継続されている。M集団に生まれた個体は、周りのオトナたちが当たり前のようこの行動をするのを目の当たりにする。その子がワカモノになる頃には、きつと当たり前のようこの行動をおこなうようになるだろう。誰が発明した行動だろうかと考えたりはしないだろう。古文書に記録が残るわけでもないし、言葉のない彼らがコウトウ伝承として語り継ぐこともない。それでもこの行動は X な時間の流れの中で脈々と続いている。

霊長類学が開始されるよりも前に今西はこう書いていた。

歴史を自然に対立させ、歴史を人間だけのもののように考える人たちの反省を促す必要がないであろうか。(今西 一九四一、一五九頁)

- 1 -

そしてまえばきでも触れたように、今西は言葉を持たない動物の代わりに動物の社会の歴史性を記録するという目論見で霊長類社会の研究を始めたのだ。今西の影響を強く受けて、社会や文化ということについては積極的に発言をしてきた日本の霊長類学者たちも、なぜかこと歴史についてはこれまでにあまり語ってこなかったように思う。

歴史には「偶然」と「現にそうであることの強み」が伴うとステイヴン・グールドは言う(グールド 一九九一、八九頁)。グールドは古生物学者であり、進化学者である。現在の生物が見せる形質をすべて環境への適応で片付けようとするネオ・ダーウィニストたちに対して論陣を張り、生物の進化には歴史的な要素があつたことを繰り返して主張した。

グールドは、身近な例をうまく使って分かりやすく説明するのが非常に上手い人だが、彼が生物進化が持つ歴史的な側面をうまく言い表した例が、タイプライターのQWERTY配列と呼ばれるものだ。現在、タイプライターはほとんど過去のものとなり、見たことすらないという若い人も多いかもしれない。かく言う私も、小さい頃に父親の持っていた英文タイプライターを叩かせてもらったことがあるくらいで、実用で使ったことはない。

だが、タイプライターがほぼ絶滅した現在でも、QWERTY配列自体は私たちの身近なところに生き残っている。いや、むしろ昔よりも増殖している。パソコンのキーボードを見てほしい。アルファベットの部分が左上から順番にQ・W・E・R・T・Yとなつていないはずだ。現在使われているパソコンのキーボードのほとんどは、タイプライター時代から引き継がれたこの配列を採用しているのだ。今私たちが書いている原稿もまたQWERTY配列のキーボードで入力している。

少なくとも今のパソコンのキーボードについては、QWERTY配列である必然性はない。むしろQWERTY配列には不合理な点もある。たとえば、英文でも和文でもよく使うAというキーを力の弱い左手の小指で打たなければならぬのはどう考えても合理的ではない。にもかかわらず、QWERTY配列になつてしまっているのはなぜか。普段私たちが、その不可解さを意識することは少ない。

QWERTY配列の成立にはどうも諸説あるようだが、グールドによればそれはかなり偶然の要素を伴っていた。かつては複数の配列が「」を削っており、タイプライター企業間の競争で、異なる配列のキーボードで公開の対決をおこなうといったことがあつたらしい。その際にQWERTY配列を採用していた会社が雇ったのが、ブラインド・タッチができる人であつた。対決ではQWERTY配列が勝利した。その結果が喧伝され、ついにはQWERTY配列が市場の大部分を占めるようになったという(グールド 一九九一、九一頁)。つまり配列そのものの優劣というよりも、たまたま誰がそのキーボードを使ったか、という要因がその後のメイヴンを大きく分けたのである。

いったんQWERTY配列が優勢になると、一気にその流れは加速される。初心者にとってはまったく意味不明なこの配列も、使っているうちに慣れてくる。完全にブラインド・タッチができるようにはならないとしても、感覚的にこの配列が使いやすいやすくなつてくるはずだ。他の配列のキーボードを使おうとすれば、また一からやり直した。だから、その人は、いかに他に Y な配列のキーボードがあつても、QWERTY配列のキーボードを再び購入するだろう。

何も Z な側面だけでなく、こうしたことは人間の歴史の中ではしばしば生じる。政治であれ経済であれ、何かが大きく変化するとき、そこには必ず偶然の要素が絡んでいるし(そうでないなら人間はもつと未来を正確に予測できるはずだ)、何かがいっただん変化して主流になつてしまつと、なかなかその流れは止められないものだ。



(6) 文中の傍線部「対角毛づくろい」とは「向かい合って座った二頭が、頭の上で手を握り合い、余った方のお互いの毛づくろいをする行動」のことである。この「対角毛づくろい」に関して本文中で筆者が述べていることとして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 群れの中で誰かが発明した「対角毛づくろい」と呼ばれる行動が、生物学的な遺伝によって群れに所属する個体に継承されていくことで、世代を超えてひきつがれていく。

イ 群れの中で偶然行われた「対角毛づくろい」と呼ばれる行動が、群れに所属する個体によってごく自然に行われていくことで、代々継承されていく。

ウ 群れの中の力をもつ個体が発明した「対角毛づくろい」と呼ばれる行動が、親子の間で代々受け継がれていき、集団独自の行動となっていく。

エ 群れの中の若い個体が偶然に行った「対角毛づくろい」と呼ばれる行動が、同じ世代の者たちの中で意味をもつ行動として広がり、他の行動を圧倒していく。

(7) 文中の空欄 X・Y・Z にそれぞれ入る語句として最も適当なものを選択肢のアイウエオから一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ選択肢は二度用いてはいけない。

ア 合理的      イ 相対的      ウ 社会的      エ 技術的      オ 先天的

(8) 文中の傍線部「今私が書いている原稿もまたQWERTY配列のキーボードで入力している」とあるが、筆者は、「タイプライター」や「パソコン」で採用されている「QWERTY配列」はどのような経緯で今も使われていると考えているか。その経緯について七十文字以内で説明せよ。ただし、解答においては「QWERTY配列」を□と表記すること。また、□は一字として数える。

二 一次の文章を読んで、問い(1)～(6)に答えよ。(36点)

高島明石、二十八歳。父親の転勤先の兵庫県明石市で生まれたから、というのがその名前のユライである。

芳ヶ江国際ピアノコンクールの出場者では最高齢であり、応募規定ぎりぎりの年齢である。低年齢が当たり前で、この歳は完全に年寄り扱いだ。

コンクールのドキュメンタリーを撮りたいので、撮影させてほしいという申し出があった時、明石はその担当者が高校時代の同級生、仁科雅美だったので驚いた。

聞けば、企画を出したのも彼女で、明石が出るのを知って、明石を担当させてほしいと頼んだのだという。

芳ヶ江は日本有数の企業城下町で、芳ヶ江国際ピアノコンクールには大きな協賛企業が複数ついており、予算がつきやすいと考えられたことも、この企画が通った大きな理由らしい。

明石は最初、TV番組に出るなんてとんでもないと断った。  
「俺、二次に残れるかどうか分からないよ」

こんな歳で、勤めていて、子供までいる。正直、コンクールに出るような立場ではないのだ。「恥さらし」という言葉が頭に浮かんだくらいである。

「うーん、それでもいいの」  
雅美はきっぱりと言った。

「今、みんなが音楽に求めているのはドラマなのよ。高島君みたいに、家族を持ってコンクールに出るっていうの、共感呼ぶと思うな」

それに、雅美ははつきりとは言わなかったが、出場者が裕福な家庭のおぼっちゃま、お嬢様ばかりだと番組が締まらない、ということらしかった。明石のような変わり種がいたほうが、絵としては面白いというのだ。

確かに、明石の家はごく平均的なサラリーマン家庭だったし、妻は幼馴染で高校の物理の先生、明石自身は大きな楽器店の店員、という見事に二代に亘って凡庸な家庭である。

フヅのお父さんが国際ピアノコンクールに出る！それは、家族にカイセよという圧力と風潮の強まる日本で、なにがしかの売りになるようだった。

それでも、結局、TV出演を決めたのは、これが記念になると思ったからだだった。  
このコンクール出場が、彼の音楽家としてのキャリアの最後になることは明らかだったし、それ以降は音楽好きなアマチュアとして残りの音楽人生を生きていくことになるのだろう。

でも、明人が大人になった時のために、パパは「本当に」音楽家を目指していたのだという証拠を残しておきたい。それが決め手だった。満智子や雅美、両親にもそう説明した。

いや、本当は、違う。  
明石の中もう一人の自分が、呟く。

それは口実だ。  
そいつは、そう指摘する。

おまえは怒りを持っているはずだ。疑問を持っているはずだ。つねづね、おかしいと思っていたはずだ。

「俺が俺が」と言わないおまえ、デリカシーがあって優しいおまえ、そんなおまえが心の奥底に押し殺していた怒りと疑問。それをこのコンクールで吐き出したいと思っていないのではなかったか？

「そうだ、と明石は答える。

俺はいつも不思議に思っていた——孤高の音楽家だけが正しいのか？ 音楽のみに生きる者だけが尊敬に値するの？」と。

生活者の音楽は、音楽だけを生業とする者より劣るのだろうか、と。

少し抵抗があつてから厚い扉がゆっくりと開き、サツと中に光が射しこむ。土間の上に光の四角が出来て、その中に明石の頭の影が入りこんだ。

懐かしい匂い。

ピアノの前に座っている。足がまだ床に届かない。小さな少年の姿が浮かんだ。

もう、遠い季節のことだというのに、匂いから蘇る幼年時代は鮮明だ。

「うわあ、天井高い。立派な梁。昔の家って、丈夫よねえ」

雅美の声で、明石は現在に引き戻された。

雅美は天井を見上げる。明かりは点けたものの、まだ目が暗がり慣れない。

「中二階になつてるの？」

「うん。まあ、蚕棚つてやつさ」

「へえ、これがそうなんだ」

カメラを抱えた雅美は、蔵の中をゆっくりと写していく。

がらんとした部屋。意外に空気は乾いている。

カバールの掛かった、小さなグランドピアノ。

雅美はそのピアノにカメラを向け、じっと回し続けていた。

買ってくれた祖母は、彼が中三の時に他界している。

明石は、蔵の隅に置いてある、背もたれのない小さな木の椅子に目をやった。祖母は、あの上にもちよこんと正座して、びんと背筋を伸ばし、孫の弾くピアノを聴いていたのだ。

明石の出す音は優しいねえ。お蚕さんも、明石のピアノが好きみたいや。

「妙に馴染んでるわね、蔵の中にグランドピアノ」

「まあ、蔵自体が防音室だしな」

「よく来るの？」

「今回は久しぶり」

今でも年に一度は調律してもらっているが、今回、コンクールに参加することを決めた時にも一度念入りに調律してもらった。

調律師の花田は明石の父親といつてもいいくらいの年齢の、長年のつきあひだったが、芳ヶ江国際ピアノコンクールに参加すると打ち明けると、明石が驚くほどとても喜んでくれ、はりきって調律してくれた。

嬉しいよ。嬉しいなあ。僕は、昔から明石君のピアノのファンだからね。

ピアノは天才少年や天才少女のためだけのものじゃないんだから。

むろん、自分が天才少年でないことは知っていた。けれど、やはり花田にもそうではないと思われていたことには内心ちよつとだけ傷ついたが、まあこの歳でコンクールに記念受験のごとく参加するくらいなんだから、それがまっとうな評価だろう。

それより、花田も明石と似たようなことを考えていたのだと知り、勇気づけられた思いだった。

ピアノは天才少年や天才少女のためだけのものじゃないんだから。「これが、高島君のおばあちゃんが買ってくれたピアノなのね？ なんだか、可愛いピアノ。絵になるわ。高島君、弾いてみて」

雅美は映像の人間らしく、番組として見た目がさまになるかどうかをしきりに気にする。

明石はカバールを取り、蓋を開け、椅子を引いてピアノの前に座る。

座り慣れた椅子だ。ずっと明石の重みを受け止めてきたクッションの部分が、明石のお尻の形に窪んでいる。

コンサート用の巨大なグランドピアノに比べれば、とてもこじんまりしたグランドピアノだ。現在の、

がっちりした大柄な明石には縮んで見える。

昔はあんなに大きく感じたのになあ。

明石は、少し黄ばんだ鍵盤をそつと撫でた。

このピアノの前に初めて座った時の感激は忘れられない。

明石のピアノの発表会に来た祖母は、孫の演奏に感激して「この子は音楽家になる」と近所に触れま

わつたという。そのうちに、どこかで誰かから「プロになるのなら、アップライトピアノでは駄目だ」と

言われたらしい。

もつとも、確かに子供の頃の明石は手も大きく、技術的に高度な曲も難なく弾いてしまい、「将来の

大器」と期待されていたのだ。

近隣では随一と言われるほど大きな養蚕農家であった父方の実家だが、明石が生まれた頃には既に斜

陽産業で、跡を継いだ父の兄も電気メーカに就職しての兼業である。それでも、祖母はコソコソと稼

いだお金を貯め、中古ではあるけれど、明石にこのピアノを買ってくれたのである。

明石は嬉しくてたまらなかつた。嬉しくて泣いたのは、あれが初めてだった。ピアノを弾く者にとつ

て、やはりグランドピアノは憧れだ。

しかし、せつかく祖母が買ってくれたグランドピアノは、明石の家にはやってこなかつた。

父の転勤が多く、普通の日本のアパートの部屋には到底入らない。入ったとしても、鳴らせば近隣か

ら苦情が来る。一緒に持ち運べないと父に言われ、明石は今度は悲し涙に暮れた。

だから、夏休みやお正月、発表会の前にはいつもここにきて、日がな一日ピアノを弾いていたものだ。

もちろん、祖母はクラシック音楽のことなど何も知識はなかつた。

しかし、元々耳がいい人だったのだろう。何年も孫のピアノを聴いているうちに、耳が肥えていつた

らしい。祖母が亡くなる前の数年、しばしば明石は祖母の耳の鋭さに驚かされた。

まずは、明石の体調や気分を細かく聴き分けた。練習が終わって夕飯のテーブルを囲むと、「疲れて

るなあ」とか、「何か心配ごとでもあるんか？」と声を掛けてくる。それがごとごとく当たっていて、

いつのことだったか、「明石は、なんか気になることがあると音がと詰まりになるなあ」と言われてび

つくりしたことがある。レッスンでも、気持ちに余裕がないと、しつかり「ため」をもって弾くことが

できず、調子のいい時に比べ、演奏時間が短くなりがちだというのは何度も先生に指摘されていたから

だ。それも、普通に聴いていたら気付かない程度なのかな時間なのだけれど、祖母はそのことに気付

いていたのである。

また、近所でピアノを習っている子がしばしば遊びに来て交代で弾いていると、祖母は誰が弾いてい

たか、その子がどういう性格かを実に正確に言い当てるのだった。

明石の音楽観や、今胸に抱えている反発は、祖母の存在の影響かもしれない。

あいつ、ピアノの中に虫飼つてるらしいぜ。

芋虫だらけの部屋で練習してらんだって。キモチワルツ。

蚕部屋を改造した蔵だと言ったら、いつのまにかピアノ教室ではそんな噂が流され、ずっとからかわれ続けた。一人、執拗にそのことにこだわる男の子がいて、彼は明石とは別の音大に行ったのだけれど、大学生になってまで、明石の学校の級友にその話を面白おかしく吹きこみ続けるのには閉口した。今にしてみれば、彼はそのピアノ教室での実力は明石に次いでいつも二番手であり（結構有名な、これまでに何人もプロを出しているピアノ教室だった）、温厚で誰にでも好かれる明石のことが羨ましかったのだらうと思うが、あまりのしつこさに、しまいは笑ってしまっただけだ。

大学の友人に、東京のとても有名な私立の女子校を出ている子がいた。彼女から、その学校の生徒の両親の職業でいちばん多い組み合わせは、父親が医者で母親がピアノの先生だ、という話を聞かされてびっくりした。

図抜けた天才少年ではなかったものの、それなりに将来を囑望され、音大まで進んだ明石は、この業界とその周辺の一部の人々の持つ、歪んだ選民思想に違和感を抱き続けてきた。

音楽を生活の中で楽しめる、まっとうな耳を持っている人は、祖母のように、普通のところにいるのだ。演奏者もまた、普通のところにいるのではないだろうか。

プロを目指す道がないわけではなかった。というより、プロになるかならないかは本人の意思だけである。ピアノも音楽も愛していたが、明石は広いようで狭い、「普通ではない」あの世界に棲むことを内心どこかで恐れていた。自分は「普通のところ」にいたかった。祖母のような人の棲む世界に所属していたかったのだ。

「この曲知ってる。なんて曲だっけ？」

「シューマンの曲だよ。トロイメライっていうの」

ゆったりと曲を奏でながら、明石は雅美に答えた。

「これも知ってるでしょ」

別の曲を弾く。

「あっ、胃薬のコーマーシャルの曲だね」

「ショパンだよ」

「やっぱ、高島君の音は優しいね」

明石はなぜかどきどきとした。

お蚕さんも、明石のピアノだとうるさくさうさよ。

まるで、祖母が雅美の身体を借りて、明石に話しかけてきたような気がしたのだ。

不意に、じわっと身体の奥から何か温かいものが流れ出してきた。

「俺、ここにもって、コンクールの準備の仕上げするよ」

「え？ 那須高原かどこかのスタジオ借りるって言ってなかった？」

「やめた。やっぱ、このほうがいいや」

「そう？ 撮影するほうとしては、近くて助かるけど」

雅美は戸惑った声を出す。

(恩田陸「蜜蜂と遠雷」による)

(注) ① ドキュメンタリー…… 実際あった出来事をそのまま記録したもの。

② 企業城下町…… 巨大企業または同種の企業群を中心として発達した町。

③ 二次…… コンクールの第二次予選のこと。

④ キャリア…… 職業・技能上の経験や経歴。

⑤ 満智子…… 高島明石の妻。

⑥ デリカシー…… 繊細な心づかい。

⑦ 生業…… 生活していくための仕事。

⑧ 中二階…… 建物の正規の階の途中に床を設けてつくった天井の低い階。

⑨ 蚕棚…… 蚕を入れて飼うかごをのせておく棚。蚕を育ててまゆをとることを「養蚕」という。

⑩ グランドピアノ…… 弦を水平方向に張った大型のピアノ。平型ピアノ。

⑪ 調律…… 楽器の音を標準音に合わせて、一定の音調に調整すること。調音。

⑫ アップライトピアノ…… 弦を垂直方向に張ったピアノ。主に家庭用。豎型ピアノ。

⑬ 日がな一日…… 朝から晩まで一日中。

⑭ 寸詰まり…… 規定よりも寸法が短い様子。

⑮ 執拗に…… 一つのことにとこだわって、しつこい。

⑯ 音大…… 音楽大学のこと。

⑰ 囑望…… 望みをかけて当てること。

⑱ 選民思想…… 自分たちは神によって選ばれた特別な民族・人種であるという信仰、確信。

(1) 文中の傍線部 ユライ・カイキ をそれぞれ漢字に改めよ。(楷書で書くこと)

(2) 文中の傍線部 変わり種・斜陽産業・閉口した の語句の意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

b 変わり種

ア ある集団の中で経歴などに他の人とは違った点のある人

イ 信念や主義・主張を大きく変えながら生きてきた人

ウ 話の材料になるような、外見が風変わりな人

エ 物事を中心にして、大きな変化をもたらす人

e 斜陽産業

ア 時代の変化によって、勢いが衰えはじめている産業

イ ある分野で注目を集めており、人気のある産業

ウ 技術の普及により、すっかり定着した産業

エ 行き過ぎた競争で、利益の上がない産業

g 閉口した

- ア 怒りにまかせてひどい言い方をした
- イ どうにもならず困り果てた
- ウ 悔しさにじっと耐えた
- エ 腹を抱えて大笑いした

(3) 文中の傍線部 d 今回、コンクールに参加することを決めた とあるが、参加の本当の理由を、傍線部 d より前の文中の表現を用いて 五十五字以内 で説明せよ。

(4) 文中の傍線部 f 明石の音楽観や、今胸に抱いている反発 とあるが、明石がピアノや音楽をどのようにとらえているかを説明したものととして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア ピアノは才能や家庭環境に恵まれた者のためだけにあるわけではないが、裕福な家庭に生まれればピアノの先生を母親に持ち、結果として音楽のみに生きた孤高の音楽家だけが尊敬に値すると言わざるをえない。

イ ピアノは才能や家庭環境に恵まれた者のためだけにあるのではなく、音楽は生活から離れた特別なところにあるものではなく、演奏をする側も演奏を聴く側も生活の中で音楽を楽しむべき。

ウ ピアノのプロになるかならないかは本人の意思だけによるのであり、音楽の知識など何もなくてもそばで聴いているうちに耳は肥えていくものであり、祖母のような耳の鋭い人のために演奏したい。

エ ピアノのプロを目指す道がなかったわけではないが、現在の音楽業界とその周辺の一部の人々に対する反発を抱き続けており、自分をからかい続けた男の子のこともいまだに忘れられずにいる。

(5) 文中の傍線部 h 「このほうがいいや」とあるが、「いい」が「いい」のはなぜか、七十字以内で説明せよ。

(6) この文章における表現と内容について説明したものととして 適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア フツツのお父さんが国際ピアノコンクールに出る！はおそらくは雅美による、ドキュメンタリーでの明石に関する宣伝文であるが、「フツツのお父さん」と「国際ピアノコンクール」とのミスマッチに表現のおもしろさがある。

イ ピアノの前に座っている。足がまだ床に届かない。小さな少年の姿が浮かんだ。で明石は遠い昔のことを想起しているが、「ピアノの前に座っている」だけかは、その足元に焦点を合わせることで、幼年時代の自分の姿として次第に鮮明になっていく。

ウ 明石の出す音は優しいねえ。お蚕さんも、明石のピアノが好きみたいや。はおそらくは生前の祖母がよく口にした言葉だと思われるが、「お蚕さん」という言葉遣いには、養蚕で暮らしを立ててきた人ならではの蚕に対する愛着や感謝が感じられる。

エ ピアノは天才少年や天才少女のためだけのものじゃないんだから。は調律師の花田の言葉であり、この言葉に明石は少しばかり傷つきはしたが、何よりも自分のピアノのファンの存在を知ってとても勇気づけられた。

三 中国の呉松孝はある日、川で女性の筆跡によって詩が書かれた柿の葉を拾った。それ以来、松孝はその葉を手元に置き、詩を書いた女への恋心を募らせていった。後日、松孝は募る恋心から、詩に對して詩を返すという当時の習慣にしたがつて、別の柿の葉に返事の詩を書いて川に流した。以下に続く古文は、その後の話である。これを読んで、問い(1)～(6)に答えよ。(28点)

松孝、柿の葉に詩を書きたる人のみ、恋しくて、いかにも、こと事せむとも覚えざりけれど、親のする事なれば、心にもあらで、むこになりにけり。この女の、思ふさまにて、あはれに心ぐるしかりければ、かの、あけくれ恋ひ悲しびけるも、やがて、思ひ忘れて、ふる程に、女のいひけるは、「我が、物思ふ人のけしきにて見えしは、いかなる事ぞ、ねがはくは、われに隠す事なかれ」。松孝、答へていはく、「われ、昔、宮のほかにして、川の流れにあそびき。水の上に、木の葉のあるを見れば、女の手蹟にて、ひとつの詩を書けり。それを見て、今日今に忘るる事なし。しかはあれど、君に、かく親しくなりて後、ことのほかに、思ひなぐさめるなり」といへり。女、これを聞きて、「その詩は、いかがありし。また、その詩の和かつくりたりし」といひければ、「しかありき」といらへければ、女、この事を聞くに、涙さきにたちて、契りのおろかならぬことを、知りぬ。「その詩は、みづからの詩なり。和の詩、わがもとにあり」といひて、おのおの、とりいでたるを見れば、互に、我が手にて見ゆるを見るに、おぼろげの契りには、あらざりけりといへる事を知りぬ。「そもそも、いかにして、われが詩をば得し」「この身、いたづらにして、月日を送る事を嘆きて、川のほとりにあそびき。いはのはざまに、

流れとまりたる木の葉を見れば、ひとつの詩あり。もし、ありし我が詩を見ける人の、作れると思ひて、おきたりつるなり」とぞ申しける。これを聞けば、妹背のなからひ、さきの世の契りの、おろかならぬより、思ひよる事なれば、あし、よしとも、さだむべきにもあらず。

〔俊賴隨腦〕による

(注) ① いかにも、こと事せむ……なんとしても、ほかの女性に関心をもちつことにしよう

② 思ふさまにて……意のままに従い募る様子であるので

③ やがて……次第に

④ 宮のほかにして……宮中の外で

⑤ あそびき……あちこち気ままに歩き回った

⑥ 手蹟……筆跡

⑦ 和……答える詩・唱和する詩のこと。

⑧ しかありき……その通りだ

⑨ 契りのおろかならぬこと……結びつきがいい加減ではないこと

⑩ 我が手にて見ゆるを見る……自分の筆跡に見えたと判断する

⑪ おぼろげの契り……通り一遍の縁

⑫ いたづらにして……むなしく

⑬ 妹背のなからひ……夫婦の間柄

⑭ さきの世……前世

(1) 文中の傍線部 a 親のする事なれば、心にもあらで b あけくれ恋ひ悲しびける c 我が

物思ふ人のけしきにて見えしは、いかなる事ぞ、は文脈上どのように解釈できるか、最も適当なのを次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a 親のする事なれば、心にもあらで

ア 親が勧める習い事であるため、興味はないけれど

イ 親がしている仕事であるので、不本意ではあるけれど

ウ 親が企んだ悪事であるため、突然のことで驚いたけれど

エ 親がとりはからった事であるので、本意ではないけれど

b あけくれ恋ひ悲しびける

ア 明けても暮れても恋しく思っている、詩を書いた女に会えないのを悲しんでいたこと

イ 明けても暮れても恋しく思っている、愛を誓った夫と会えないのを悲しんでいたこと

ウ 明けても暮れても恋しく思っている、生き別れた妻と会えないのを悲しんでいたこと

エ 明けても暮れても恋しく思っている、遠く離れた親に会えないのを悲しんでいたこと

c 我が、物思ふ人のけしきにて見えしは、いかなる事ぞ

ア 私が、あなたに遠くの景色を眺めているように頼んだのは、どうしてだと思うか

イ 私には、あなたが何か思いにふけている様子に見えたのは、どういう理由か

ウ 私の夫のあなたが、その心の中に思い描いている風景は、どのような絵になるのか

エ 私には、あなたが物思いにふけている姿は、どれほど魅力的に見えるだろうか

(2) 文中の傍線部 思ひ<sup>1</sup>忘れて、<sup>2</sup>知りぬ、<sup>3</sup>申しける のそれぞれの動作の主体を組み合わせたものとして最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 1 松孝 2 松孝 3 女
- イ 1 女 2 松孝 3 松孝
- ウ 1 松孝 2 女 3 女
- エ 1 女 2 女 3 松孝

(3) 文中の傍線部 <sup>d</sup>その詩は、いかがありし。また、その詩の和かつくりたりしは、「その詩は、どうだったか。また、その詩に答える詩を作ったのか」という意味である。女がこのような質問をしたのはなぜか、最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア その詩が書かれた柿の葉は一枚でも貴重であり、もしも答える詩と合わせて二枚あるのなら手に入れたと思うから。

イ その詩に対する夫の意見と、彼が答える詩を作れたかどうかを確認することで、今後の詩作の参考にしたいと考えたから。

ウ その詩は自分がかつて作ったものである可能性が高いと感じたうえに、答える詩についても思い当たることがあったから。

エ その詩のことを夫が褒めるだけでなく、答える詩も作ったのなら、妻として夫のことをとがめようと考えたから。

(4) 文中の傍線部 <sup>e</sup>流れとまりたる木の葉 について説明したものと最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 女が詩を書いて流したが、流れなかった木の葉

イ 松孝が答える詩を書いて流した木の葉

ウ 女が詩を書いて流した二枚目の木の葉

エ 松孝の親が詩を書いて流したが、流れなかった木の葉

(5) 文中の二重傍線部 <sup>\*</sup>おのおの、とりいでたる とあるが、だれとだれがどのようにしたのか、四十字以内で説明せよ。

(6) 文中の松孝について説明したものと最も適当でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 本当は深い縁で妻と結ばれていたことに、結婚した際は気がついていなかった。

イ 妻との日々を過ごすうちに、詩を書いた女に対する恋心は薄らいでいった。

ウ いつの日にか柿の葉が詩を書いた女と自分を巡り合わせてくれるだろうと予想していた。

エ 妻の問いかけに対して、自分の思いを包み隠すことなく正直に答えた。